

健康アドバイス

No.236



立川綜合病院 副院長
日本ヘルニア学会理事

蛭川 浩史

腹壁癒痕ヘルニア

お腹の手術をして、お腹に傷痕がついたら、きれいに治ってほしいですよね。ところが、人によっては傷がうまく治らず、膨らんできてしまうことがあります。お腹の手術では、腹壁の筋層と皮膚を別々に縫い閉じます。

術後に強い腹圧がかかったり、創感染を起したりすると、筋肉を縫い閉じた部位がうまくくっつかない事があります。すると、筋肉の保護がなくなった腹壁は皮膚だけで覆われることになるので、腹圧をかけるとその部位の傷が膨らんでしまいます。これを腹壁癒痕ヘルニアと言います(図1)。術後10、20%の方に発生する、最も多い合併症の一つです。肥満の多い外国では、鼠径ヘルニアより問題となっています。糖尿、透析、肝硬変、ステロイド剤や抗がん剤の使用、喫煙など、傷の治りが悪い状態の人にも高頻度に起こり

ます。

手術直後からヘルニアとなっている場合もありますし、術後10年くらいしてから、ヘルニアが出てくることもあります。意外に3割くらいの方は、自分の傷が膨らんでいることに気づいていないこともあるようです。

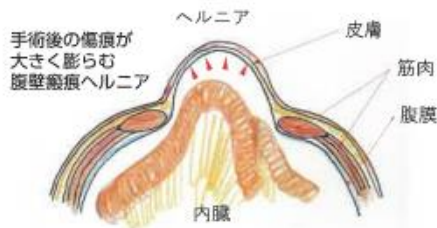
腹壁癒痕ヘルニアを放置すると、どんどん大きくなる場合があります。また、筋肉が外側に偏位し、萎縮してしまふことがあります。こうなると、腹圧をかけても傷が膨らむばかりでうまく腹圧をかけられません。すると、腹圧が必要な呼吸、咳、こみ、いきみなど命に関わる動作がうまくできなくなることがあります。

そのほかにも、最近では、腹壁癒痕ヘルニアを放置すると、肥満や腰痛などの、腹壁ヘルニアとは直接関係のないような症状を起こすことがあると考えられています。

私たち外科医は、大きな手術の最後でも気を抜かず、傷をきれいに治そうと努力しています。それでも、腹壁癒痕ヘルニアの発生は減りませ

ん。治療には、手術が必要です。その方法も日進月歩です。次回は腹壁癒痕ヘルニアの手術方法について説明します。

【図1】



右の図の矢印の部分の断面図

